

2025年6月1日 第二礼拝

説教題「神の右に座す方」ルカ福音書20章41〜44節、ローマ信徒への手紙8章34〜35節a

主任牧師 加藤 誠

「このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。」(ルカ福音書20:44)

イースターからペンテコステに向かう時に、今年はルカ福音書から「復活の信仰」について聴いてきました。来週がペンテコステなので、今朝が一区切りとなります。

ガリラヤからエルサレムにやってきたイエスを何とかやりこめてやりたいと、律法学者やサドカイ派の人びとがいろいろと難題を突きつけて挑みますが、次々に論破されて言葉を失った彼らに、主イエスの方から問いかけられたのが今朝の場面です。それは「メシア」「ダビデの子」についての問いでした。

「メシア」とは救い主のことであり、ユダヤの人たちは旧約聖書に基づいて、神が遣わされるメシアは「ダビデの子」（ダビデ王の子孫）であり、今自分たちを苦しめている異国の王の支配を打ち破って、栄光のイスラエル王国を再建してくださると受け取っていました。人々は、ローマ帝国を打ち破ってくれそうな人物があらわれると「ダビデの子ではないか！」を期待を寄せたようです。また「我こそはダビデの子だ」と語る人物も時々あらわれたようで、ガリラヤで主イエスが力強く神の国の到来を語り、奇跡を起こすのを見た人々は「このイエスこそダビデの子だ」と語り、弟子たちも「この方こそイスラエルを再建してくれるメシアだ」と考えたのでした。

けれども主イエス自身は一度も「自分はダビデの子だ」と語っていませんし、人々からそう呼ばれることを拒否されました。自分は人々が期待するメシアではなく、神の御心に従い、神の救いに仕えるメシアであると自覚されていたからです。

その主イエスが、旧約聖書の詩編を用いて人々のメシア理解を正されたのが今朝の箇所です。42節以降は、ダビデ王がつくったと言われている詩編110編の引用です。

「主は、わたしの主にお告げになった。『わたしの右の座に着きなさい』」の最初の「主」は「主なる神、天の神」のこと、「わたしの主」は「メシア」のこと。ダビデがそのメシアは天の神によって「右の座に着けられた」と歌っているのだから、そのメシアが「ダビデの子孫」であるわけがないだろう…と主イエスは語られたのです。

現代の私たちには正直なところピンとこないやり取りですが、それまでずっと長い間「メシア＝ダビデの子」と思い込んできた人々にとっては重い衝撃だったようです。つまり主イエスは「あなたはこの詩編をどう読むか？」と聖書で勝負された。確かに旧約聖書にはダビデの子孫がメシアとしてイスラエルを回復させると読める聖書箇所が多くある。でもそれだけだろうか。あなた自身がもう一度聖書を読み直すべきではないかと問われたのです。そしてこの詩編110編は、主イエスが十字架で殺された後、

神によって復活させられ、さらに天に昇られた一連の出来事を体験した初代教会の人びとにとって非常に大きな意味をもつ聖書箇所になったのでした。

多くのユダヤ人にとって、十字架で処刑され神に見捨てられた男がダビデの子（メシア）ではありえませんでした。彼らにとってイエスは「ダビデの子と期待されたけれど期待外れに終わった男」でした。メシアはローマ帝国から自分たちを解放して目の前の現実を変えてくれる男だったからです。イエスはそのメシアの条件からはほど遠い男でした。けれども初代教会の弟子たちは復活された主イエスと出会い、主イエスが天に戻られるのを目撃する中で、詩編 110 編でダビデが告白したメシア、「神の右に座するように」語りかけられたメシアは「主イエス、その人だ」と示されたのです。

ペンテコステの日、ペトロは人々の前で「イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を注いでくださいました」と大胆に説教しました。ステファノは石打の刑に遭って息を引き取る直前に天を見上げて「神と神の右に立っておられるイエスを見た」のでした。そしてパウロは「死んだ方、否、むしろ復活された方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、私たちのためにとりなしてくださっているのです」（ローマ 8：34）と語りました。人々は十字架で「イエスは終わった」と考えました。しかし「十字架では終わらない。続きがある！」と、その後の復活と召天を体験した弟子たちは、このイエスこそ天に昇り「神の右に座す方である」という告白に導かれました。この方こそ私たちすべてを罪の滅びから救い出してくださる真のメシアだと。

今朝、私たちに問われているのは「今、この世界で、私たちは誰をメシアと告白するのか？」ということです。植民地支配に長く苦しんできたイスラエルの人々が、ローマの支配を打ち破り、イスラエル民族の誇りと独立をもたらしてくれるリーダーを、切実に神に求めた心情は理解できます。現代を生きる私たちも、憎悪と対立の戦争を早く終わらせてくれる力強いリーダー、失業率が高く物価も高い現実を変えて人々が安心して暮らせるように導いてくれる政治指導者を求めます。そのように「現実問題を解決してくれるメシア、現実を変える救い主」を私たちは求めます。しかし、その時に主イエスは私たちが抱えている根本的な問題に切り込まれるのです。私たちの中に創り主なる神への畏れと感謝があるか。この世界を愛し、世界中の一人ひとりを愛してやまない神の真実の愛に応答して自分のように隣り人を愛する愛に立っているか。自らの自己中心の罪を悔い改めて神に立ち帰る祈りがあるか。目の前の現実問題を解決する前に「私たちと神との関係、私と隣り人との関係」という根本的な関係が変えられる大切さを示されたのです。「現実問題の解決」の前に「関係の変革」を祈っていく。わたしと神、私たちと隣り人が神の真実な愛によって変えられていくところに真の救いがある。十字架に私たちの罪を釘づけにし、私たちを愛と希望に生かす復活の主を、真のメシアとして告白していきたいのです。